

『古典教材の学習指導』

古典ブームといわれる昨今であるが、学校教育における古典は、危機的狀況に置かれている。授業時間の削減、大学入試からの追放、そして生徒の冷やかな反応というのもそのあらわれである。このような状況において、われわれは古典教育の新生のために、日々の実践・研究に積極的に取り組む必要がある。

阿部真人氏の『古典教材の学習指導』は、先生の二〇年間の国語科教育の実践・研究の結実であり、古典教育の新生に大きく寄与するものである。

本書の内容は、次のように構成されている。

第一章 古典教材の学習指導 その一

——『万葉集』の場合——

第二章 古典教材の学習指導 その二

——『平家物語』の場合——

第三章 古典教材の学習指導 その三

——『徒然草』の場合——

第四章 古典の学習指導上の諸問題

第五章 古典教育論の考察

第六章 古典学習における授業像

——「国語学習史」の事例的考察を
通して——

論稿の大半は、昭和四十四年から昭和五十年までの六年間に発表されたものである。第一章から第四章までは「実践編」で、広島大

学教育学部附属東雲中学校にて在職の実践に基づく論稿であり、第五章・第六章は「理論編」で、同大学教育学部東雲分校の助手になられてからの研究であると記されている。

第一章から第三章までは、生徒の学習前後における意識・感情の質的転換を科学的に分析することによって、それぞれの教材について「何をどこまで深め得ることが可能か」を明らかにするとともに、それらをふまえて、実際の授業における指導法へと論を進めておられる。

具体的には、『万葉集』では、一読後の教材反応を調査した二十四首のうちから選んだ十五首について、『平家物語』では、「敦盛の最後」「那須の与一」、「徒然草」では「榎の木の僧正」「西大寺の静然上人」「春暮れてのち」について考察が加えられており、「発展学習」の実践報告も、各章ごとになされている。

第四章では、「古典学習指導の問題点」

「入門期における古典の学習意識」「短歌教材における学習抵抗」「学習活動を活発にする指導」「イメージをふくらませる指導」といった、実践における重要な問題について、氏の豊富な実践から導かれた貴重な意見が述べられている。

第五章では、「職後の国語教育界にあって古典教育についてのきわだった論を展開し、古典研究者や教育者に多大な影響を与えてきた時枝誠記・荒木繁・益田勝実の三氏の古典教育論に焦点をあわせ、三氏の所論の共通な点、個性的な点を解明することを目的」（二六一―二六）として、「理論的な側面から、古典教育の未来像を求めよう」としておられる。

第六章では、学習者の側から記述した「国語学習史」をもとに、古典の授業を「読解力養成を中心とした授業」「鑑賞活動を中心とした授業」の二つの類型に分け、それらを検討することによって、古典学習における授業のビジョンを明らかにしておられる。

阿部氏の研究方法は、実践的・科学的であり、生徒の反応に対する分析も鋭く、その分析結果から導かれた教材の扱い・指導法は、きめ細やかである。本書は、教室での実践にすぐにも役立つものであるとともに、古典学習の「あるべき姿」を示しており、目標・内容・方法に関し、理論的にも多くのものをわれわれに与えてくれる。

（昭和五二年四月一日、文化評論出版社、

A五判、三一七ページ、二五〇〇円）

（粕谷倫生）